

水質汚濁防止対策調査（坪川）

担当者増殖課長 頼 茂
技 師 青 山 禎 夫

I 調査目的

坪川における水産業に及ぼす水質汚濁の実態調査をおこない、将来における汚濁防止対策上の指針とする。

II 調査内容

- (1) 調査場所 坪川
- (2) 調査期間 昭和42年9月1日～全43年3月31日
- (3) 調査項目
 - イ、水域内の漁業の概況
 - ロ、生物調査

III 調査結果

(1) 漁業の概要

昭和15年を境にして水源一帯の日本鮎業上北鮎業所が本格的操業に入ってから河川の汚染が始まり、漁場は一変して組合の存在も有名無実の形となり、中野川との合流点までの本流筋には魚類が全然棲息しない。たゞ小坪川を始め幾つかの支流の沢には僅か乍ら鮭鱒族のイワナヤマメが棲息する程度で、最も漁場価値のある上中流地区が潰滅の状態にあるので、本河川の漁業は成立っていない。

鮭鱒については、昭和11、12年頃は県下においても第2位の溯上数（5,800尾）を記録した時代もあつた。（第1表）

(2) 生物調査

(イ) ベントス

鉾山廃水流入前の本流と二戸瀬川、小坪川の各支流には、蚌類が主体に底棲昆虫がみられるが、廃水流入後の本流筋と松沢には全くみられない。（第2表）

(ロ) ネクトン

漁業の概況の項でも述べ、また第1図にも示すとおり、河相、魚相も一変したため、最下流域の部分に限られ、小川原湖から溯上又は湖と交流する魚種のみがみられる。本河川の魚種及び漁場については、過去の実績を述べるより方法がないまでに漁場としての価値がなくまたその魚種も稀めて少ない。

IV 考 察

河川内の砂利採取は、5ヶ所でおこなわれているが、規模は差して大きくなく、魚族に及ぼす影響は現在のところない。

また、用水堰が7ヶ所設けられているが、何れも魚族の溯上降海に多大の支障を支える内容のものでなく、たゞ最近完成した高さ50mの多目的ダムが大きな障壁となつている。

然し、これよりさき鉾山排水の浄化がおこなわれない限り、本河川の魚族の棲息、漁場の利用

復活は考えられない。

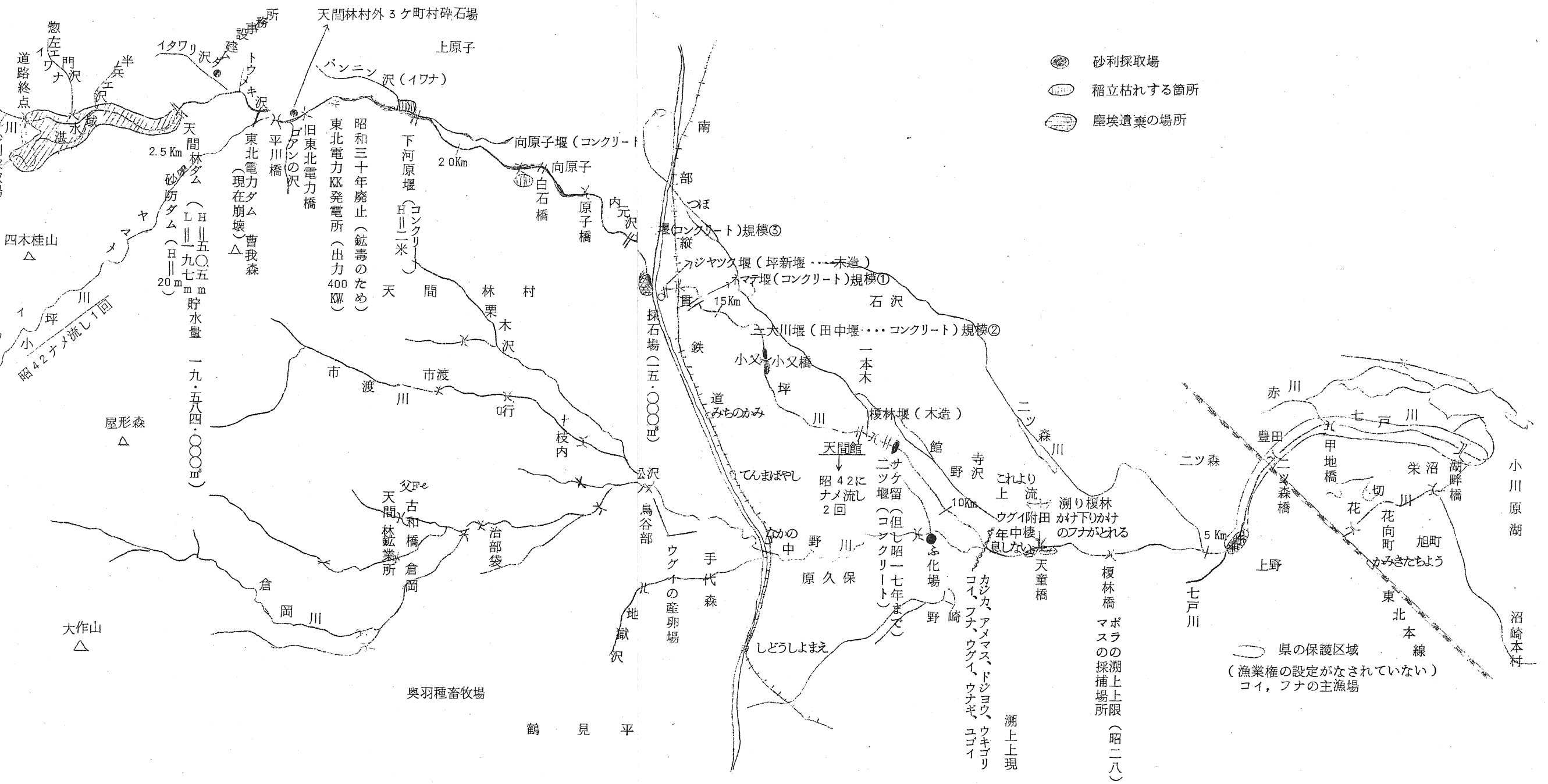
第1表 鉾山排水流入前の漁獲量と流入後の現在の漁獲量表

魚 種	昭 和 12 年	昭 和 40 年	昭 和 41 年
サ ケ	25,600 Kg	— Kg	— Kg
マ ス	2,560	—	—
コ イ	2,400	120	250
フ ナ	2,040	1,000	1,500
ウ ゲ イ	31,200	600	300
ニ ジ マ ス	—	50	50
シ ラ ハ ヤ	1,680	—	—
そ の 他	16,000	—	—
計	81,480 Kg	1,770 Kg	2,100 Kg

第2表 坪川水生（底棲）昆虫

	廃水流入前	廃水流入後	松沢川	二戸瀬川	天間ダム上流	小坪川	小坪川
蜻蛉目	24	0	0	71	0	146	3
積翅目	2	0	0	6	0	1	11
毛翅目	4	0	0	3	0	3	1
双翅目	45	0	0	18	0	6	2
そ の 他	3	0	0	2	0	1	1
年 月 日	42.9.11	42.9.11	42.9.11	42.9.12	42.9.12	42.9.12	42.11.21
時 間	13.00	13.10	13.45	12.45	11.40	14.20	
水 温 (℃)	13.8						

坪 川 水 系



- 砂利採取場
- 稲立枯れする箇所
- 塵埃遺棄の場所

県の保護区域
(漁業権の設定がなされていない)
コイ、フナの主漁場

坪川水系

